須知高校生のみなさんへ

令和3年度　第3学期始業式　式辞

あけましておめでとうございます。2022年がスタートして1週間が経ちましたけれども、みなさんはどのように冬休みを過ごしましたでしょうか。

2学期の終業式では、「家族でゆっくり自分の将来等について話をしてください」と話しましたが、家族の方とゆっくり話ができましたでしょうか。

3学期の始業式にあたり、生徒のみなさんには、「命の大切さ」について、話をしたいと思います。皆さんは、両親から受け継いだ自分の命の大切については、十分に理解していると思いますが、なぜ、改めて「命の大切さ」について話をするのかというと、最近の事件や事故で命が失われたり、自らの命を絶つというような報道が多くなったように感じたからです。

そこで、北海道にある旭山動物園元園長の小菅正夫（こすげまさお）さんの話を紹介したいと思います。

旭山動物園には、家畜やペットとふれあえる「こども牧場」があり、そこでは、子どもたちを椅子に座らせ、膝の上にスタッフがウサギやモルモットをそっと置き、抱き方を指導しています。ウサギを触れる前の子どもにウサギを見せて「ウサギどうだった」と聞くと、ほとんどの子どもが「かわいかった」と答えます。ところが、ウサギを抱いた後で同じように聞いてみると、「フニャフニャしてた」とか「あったかかった」、「やわらかった」、「コトコトいってた」という答えになります。多くの子どもたちは、スタッフから抱き方を教えてもらう前に、自らウサギを両手で抱え込み、頭を下げて全身でウサギを包み込みます。このような様子を見て、スタッフの方は子どもたちに「命の大切さが伝わった」と感じるようです。小菅さんは、「命は覚えるものではなく、感じるものだ」と話しておられます。さらに、「命は決して後戻りしないこと」も知っておかなければならないとも話しておられます。須知高校には、生徒、教職員のほかに、動物たちもたくさんいます。食品科学科のみなさんは実習等でその動物たちと触れ合ったことがあると思います。私は「命の大切さ」は単に知識として教えて育まれるものではないと思っています。人と人、人と動物、人と自然との触れ合いの中で、視覚・聴覚・触覚・嗅覚など人間の五感による体験を通して実感して育まれるものだと思います。須知高校のみなさんには、今日の話をきっかけに、日常生活をする中で、「命の大切さ」を少しでも意識して行動してもらえれば、それで十分だと思っています。決して強制するものではないと思っています。自分自身の命を大切にしながら、家族をはじめ周りの人や動物や自然に対して真心を持って接していけば、必ずみなさんも幸せになり、周りの人も幸せになると思います。

結びに、真心を持って接することのできる須知高校生になってくれることを期待して、3学期始業式の式辞とします。

令和4年1月7日

須知高校　校長　湯川　佳秀